

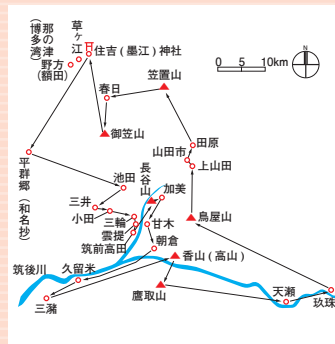
豆知識①

卑弥呼伝説

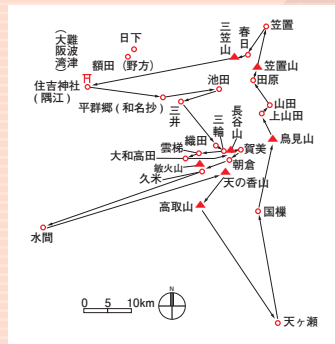
畿内・大和地方の地名と甘木朝倉の地名

邪馬台国がどこにあったか、今でも論争が続いていますが、「三輪」（現在の筑前町）を中心とする甘木朝倉の地域にあったのではないかと、という説があります。昔、民族が場所を移動するときは、それまで住んでいた地域の地名を持って移動することが多かったのです。図Aと図Bを見比べると春日、朝倉、三井、三笠山、御笠山など同じような位置に同じ地名があります。「三輪」を中心とする地域の地名が大和地方と似ていることから邪馬台国は甘木朝倉地域にあり、そこから東の大和朝倉地方に移動したのではないかと唱えられているのです。偶然とは思えない一致に太古のロマンを感じます。

図B 「三輪」を中心とする地域の地名



図A 大和地方の地名



卑弥呼は天照大御神だった？

第31代用明天皇以後の天皇は、一代の平均在位年数が10〜14年程度です。用明天皇から35代前の天照大御神が活躍していた時期は「魏志倭人伝」に記されている倭の女王卑弥呼が活躍していた時代と重なります。また卑弥呼ではないかとされている①神功皇后②倭姫③倭迹迹日百襲姫④天照大御神の4人のうち、卑弥呼が活躍した時期と重なるのは天照大御神だけです。

- ・天照大御神と卑弥呼とは活躍の時期だけでなく、次の点も一致します。
- ・天照大御神も女性。
- ・天照大御神も卑弥呼もともに宗教的権威を備えている。
- ・ともに夫を持たない。
- ・卑弥呼には弟がいた。天照大御神にも須佐之男の命、月読みの命という弟がいた。
- ・「古事記」による高木神（天照大御神と一緒にしばしば命令を下していたたかぎのかみ）と「魏志倭人伝」の女王卑弥呼の言葉を伝えるために出入りしていた一人の男とが符合する。
- ・天照大御神は大和朝廷の皇祖神であり、卑弥呼は邪馬台国の女王。大和と邪馬台国の音が似ている。
- ・などなど、歴史の不思議を感じます。



壁画：佐野至作「62花の邪馬台国まつり」



修験道の歴史

修験道の始まり

大宝元年（701年）春、修験道の開祖とされる役行者は、英彦山に登り、豊前国英彦山から筑前国宝満山までを踏破し修行する春峰、英彦山から再度宝満山までの夏峰の三季入峰を修歴したと言われます。これが後の英彦山の入峰修行の起源とされています。

修験道とその世界観

古代日本列島に住んだ人々は、秀麗な山や奇岩、大木に神々が宿ると考えてそれらを崇拝していました。英彦山や宝珠山岩屋・小石原深仙は、そうした場所であったでしょう。しかし、古代の人々は、山は神霊の世界であり人が踏み入れる場所ではないと考えていました。そこにインド起源の仏教が日本に入り、神は仏の化身であるとする神仏習合と呼ばれる考え方が生まれました。平安時代の英彦山では、四十九の窟を設け、そこを弥勒菩薩が住む世界・弥勒浄土であるとし、現実の山々・窟がそのまま神仏の世界であり、そこで修行すれば悟りが得られると考え、密教を信奉する僧侶・密教僧らが窟に籠って修行しました。しかし、鎌倉時代になると、そうした密教中心の英彦山は財政的に行き詰まり、密教とは違った人々が英彦山に台頭してきました。彼らは正式な僧侶ではなく、朝廷・幕府の許可を得ずに勝手に僧侶や神人であると名乗っていました。

こうした人々は、密教僧の下で修業を補助するようなことを行っていたり、中央の大峰山で峰々を歩き回るといって修行をしていたり、税金逃れで英彦山神領に入った人々であったりしたと思われ、彼らは後に山伏と呼ばれるようになります。

神仏分離令と廃仏毀釈運動により断絶

幕末を経て明治元年となり、新政府は「神道を中心とした祭政一致の国家をつくり上げるため、次々と宗教に関する布告が出されました。まず「神仏分離令」を出し、次に「還俗令」によりこれまで神社を管理していた山伏や僧侶に対して、出家であることを止めて俗人に戻るように命じます。それから「神仏判然令」が出され、多くの神社が名乗っていた権現号や仏像を「神体」とすること、神社で仏具を使用することを禁じ、その後、全国的な廃仏毀釈運動が起こることになります。こうして修験道は衰退・断絶していききました。



壁画：佐野至作「岩屋」

